

増上縁の研究

『往生論註』を中心に――

福田 依 正

一 はじめに

曇鸞は、『無量寿経優婆提舍願生偈註』（以下『論註』）において、他力による易行道を提示している。『論註』において、この「他力」に深く関わってくる語として、「増上縁」が挙げられる。

『論註』において、「増上縁」は三箇所出てくる。

- ① 阿弥陀如来為「増上縁」故。⁽¹⁾
- ② 然覈求「其本」、阿弥陀如来為「増上縁」。⁽²⁾
- ③ 以「斯而推」、他力為「増上縁」。⁽³⁾

①と②の文においては「増上縁」としての「阿弥陀如来」が、③の文においては「増上縁」としての「他力」が示されている。この『論註』所出の「増上縁」については、過去に多くの註釈がなされてきた。例として、より詳細な解説がなされている深励師の『浄土論註講義』を紹介する。深励師は、『論註』冒頭における易行道の説示の中に出てくる「信仏因縁」⁽⁴⁾

とある中の、「因縁」について言及している箇所において、

名目は通途の四縁の法相の通りに、たとへ阿弥陀如来の増上縁があつても行者の方に往生の親因縁がなくて往生するならば、其れは他因外道の計も同じことじゃと難ぜられぬやうに、此所に行者の信仏の因縁を出し、卷末には他力の増上縁を挙げ、行者の因縁と仏の増上縁が相依て往生すると云うが通規に違せざる所なり。⁽⁵⁾

と示している。ここに示される「因縁」とは、四縁の中の一つである「因縁」であり、中村元氏は、「結果を生ずる直接的内的原因」⁽⁶⁾と示している。「行者の因縁と仏の増上縁」とあることから、四縁の「増上縁」は「間接的原因」として理解されていることが伺い知れる。その上で、「間接的原因」としての「増上縁」を、その理解が「通規に違せざる所なり」と指摘している。さらに、

けれども意は別途を談ずる故、：増上縁と云へばとて外から助ける位のことではない。衆生が往生する因も果も悉く皆弥陀の本願力に依ると宣ふなり。⁽⁷⁾

と示してある。「間接的原因」としてのみではなく、因も果も成立させる本願力の「増上縁」という理解を説示し、その理解を別途の理解、つまり真宗独自の解釈であると示している。

ここで「因」と「縁」という概念について確認しておきたい。中村氏は、「因は結果を招くべき直接の原因、縁は因を助けて結果を生ぜしめる間接の原因。直接的・間接的な原因。内部的直接的原因と外部的間接的原因。」⁽⁸⁾と示している。

本論において、「因」と「縁」の語は、基本的にはこの意味において使用する。深励師の使用する「親因縁」(四縁の中の因縁)とは、「因」のことであり、「間接的原因」と理解される「増上縁」とは、「縁」のことであることが窺い知れる。

このように、「増上縁」を解釈するにあたり、「因」や「縁」という概念が注視されてきたことが分かる。仮に、「増上縁」を「縁」としてのみ解釈する説をA説、深励師が示したように、「増上縁」について「因」と「縁」という概念を含む語として解釈する説をB説とする。

先学において、このように二説を挙げて、B説を真宗独自の解釈とする説示は多く見受けられ、「増上縁」を解釈するにあたり、「因」や「縁」といった概念が注視されてきたことが分かる。⁽⁹⁾

しかし、先に挙げた深励師の説示には、B説の根拠を『論

註』の文の上から示すような説示は確認できない。『論註』における他の註釈においても、文の上にB説の根拠を見出すような説示はない。『論註』当面においては、「増上縁」の語を註釈する箇所は見受けられないので、『論註』における「増上縁」の用例から、曇鸞の理解する「増上縁」について検討していき、B説の根拠となる箇所を検討していく。

二 『論註』における「増上縁」の用例

『論註』巻上の妙色功德釈に、「増上縁」としての「阿弥陀如来」が示されている。

所以者何、彼土金光絶_下從_上垢業_生故。清浄無_レ不_二成就_一故。⁽¹⁰⁾

ここには、安楽国中の光明が、他国よりも勝れているということの根拠として、安楽浄土の「清浄」が「成就」されていることが挙げられている。続いて、

安楽浄土は無生忍菩薩浄業所起。阿弥陀如来法王所領。阿弥陀如来為_二増上縁_一故。⁽¹¹⁾

と示されている。安楽浄土の清浄成就の内実を、「無生忍菩薩浄業所起」と「阿弥陀如来法王所領」との二つに開き、それは「阿弥陀如来を増上縁となす」ことであると顕されている。よって、ここからは「無生忍菩薩浄業所起」と「阿弥陀如来法王所領」との、二つの説示について検討する。

「無生忍菩薩浄業所起」の「無生忍菩薩」とは、『論註』性

功德積において、

序法藏菩薩、於^三世自在王仏所、悟^二無生法忍^一。爾時位名^二聖種性^一。於^二是性中^一發^三卅八大願^二修起此土^一。即曰^二安樂淨土^一。

とあるように、法藏菩薩が、世自在王仏のもとで無生法忍を悟り、安樂淨土を修起したと顯されているので、妙色功德積において示される「無生忍菩薩」とは、法藏菩薩であると理解できる。次に、「無生忍菩薩淨業所起」という説示の中の「所起」に注目する。『論註』清淨功德積には、

仏本所^三以起^二此莊嚴清淨功德^一者、^三是故起^二此清淨莊嚴功德^一也。⁽¹³⁾
と示されているように、安樂淨土の莊嚴は、仏によって「起こされた」ものであることが分かる。また、『論註』淨入願心章には、

此三種莊嚴成就由^三本四十八願等清淨願心之所^二莊嚴^一、因淨故果淨。⁽¹⁴⁾

と示されている。それぞれの莊嚴については、仏によって「起こされた」とされる三種莊嚴について、四十八願によって成就されたものであると示している。また、「四十八願による成就」という事態を、莊嚴の因としてみていることが分かる。よって、莊嚴にとって、莊嚴成就の過程として語られる、仏によって「起こされた」という事態からも、因としてみることが可能である。

このように、妙色功德積における「無生忍菩薩淨業所起」

という説示は、安樂淨土の成立の、因の側面についての説示として理解されていることが指摘できる。

次に、「阿弥陀如来法王所領」とは、「所領」とあるので、「所領」とされる安樂淨土からみたとき、「能領」である阿弥陀如来法王は、安樂淨土自体にとって外の事象であることが推察できる。また、『論註』において、「縁」という語は、『論註』十念釈義において、

若総相若別相、随^三所觀縁^二、心無^二他想^一十念相続名為^二十念^一。⁽¹⁵⁾

と示されているように、「所觀」を「縁」として捉えている。「觀ずる」のは、『觀經』に示される「五逆・十惡の人」であるが、その人にとつての「所觀」とは「觀」の対象であつて、外の事象であると考えられる。よって、『論註』において、外の事象を「縁」として捉える箇所があることが指摘できる。ここでの「縁」は、深勵師の示す「外から助ける」と理解する「増上縁」、そして中村氏が示す「外部的間接的原因」とされる「縁」であることが推察できる。このように、安樂淨土の「能領」である阿弥陀如来法王を、安樂淨土の縁として理解することができる。

よって、安樂淨土の成立の因の側面として示される「無生忍菩薩淨業所起」と、縁の側面として示される「阿弥陀如来法王所領」という二種の説示を、「阿弥陀如来為^二増上縁^一」の内実として見ることができる。安樂淨土について示される

増上縁の研究(福田)

六四

阿弥陀如来の「増上縁」は、先に挙げたB説のように、縁としてではなく、因という概念も含んだ、特殊な「縁」として理解されていることが指摘できる。

三 小結

『論註』において、「増上縁」は三箇所使用されているが、妙色功德積において、安楽浄土に対する阿弥陀如来の「増上縁」が示されている。そこには、安楽浄土の成就について、「因」という側面からの説示と、「縁」という側面からの説示が示され、その上で、阿弥陀如来の「増上縁」によって、安楽浄土が成就するということが顕されていた。ここで使用される「増上縁」は、その箇所における安楽浄土についての釈相から、真宗独自の解釈として提示されてきた、「特殊な縁」として理解されていたのである。

- 1 筆者訓点(以下略す)・『大正蔵』四〇・八二九a二五～二六。
- 2 同・八四三c二五。
- 3 同・八四四a二〇。
- 4 同・八二六b七。
- 5 香月院深励『浄土論註講義』(法蔵館、一九八四)七五b九～一四。
- 6 中村元「因果」(『仏教思想3 因果』(平楽寺書店、一九七八)所収)二九。

- 7 香月院深励『浄土論註講義』(法蔵館、一九八四)七五b一四～一五、七五b一九～七六a二。
- 8 中村元「因果」(『仏教思想3 因果』(平楽寺書店、一九七八)所収)三一。

9 いくつかの先行研究において、『論註』における「増上縁」の定義について、註釈がされている。以下に、その箇所を列挙する。道振『往生論註要本決』(『真宗叢書』五・一八二)、慧琳『浄土論註顯深義記伊蒿鈔』(『真宗大系』六・二九八a)、慧雲『往生論註服宗記』(『真宗全書』十・一四〇a)、宣明『往生論註聞書』(『真宗全書』十一・七四b、二八八b)、大瀛『往生論註原要』(『真宗全書』一〇・二五〇a)等。この中、道振『往生論註要本決』と慧琳『浄土論註顯深義記伊蒿鈔』において、「因」や「縁」という概念を意識した解釈が示されている。

- 10 『大正蔵』四〇・八二九a二三～二四。
- 11 同・八二九a二四～二六。
- 12 同・八二八c一～四。
- 13 同・八二八a六～一二。
- 14 同・八四一b七～九。
- 15 同・八三四c一五～一七。

〈キーワード〉曇鸞、『往生論註』、増上縁、因、縁

(浄土真宗本願寺派宗学院)